

すっかんぽ

☆ 研究室だより No.18

1993年11月号

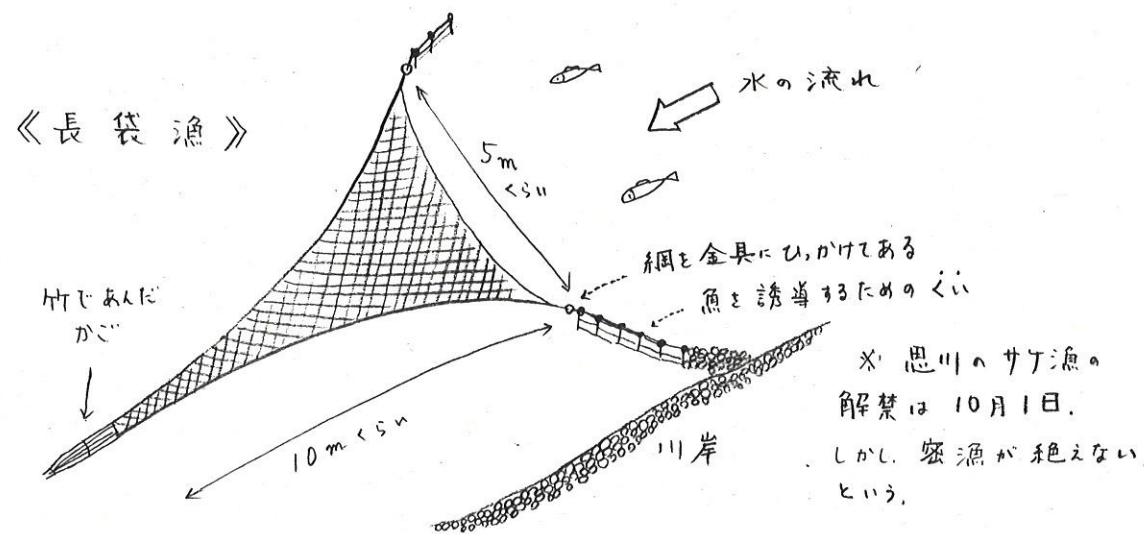
思川のサケ漁

思川にもサケがのぼってくるという話を聞いた。しかも人工化によるものではなく自然繁殖しているサケが、毎年数百から数千匹もやってくるというのだ。ちょっと信じられない気がする。しかし、現実にサケの密漁（許可がないと全て密漁になる）を監視する人達が50人くらい存在するらしい。

そして監視員にのみサケ漁の許可が与えられているのだ。

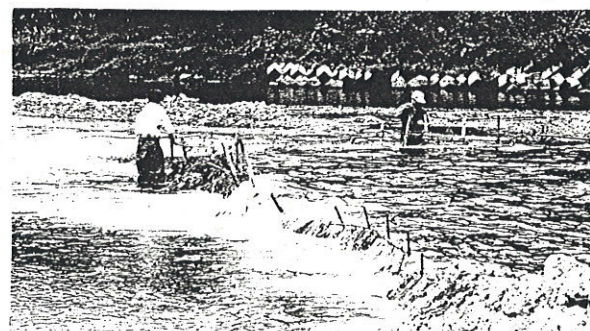
11月2日の夜、友人の青木先生から電話が来た。明日、知り合いの監視員の川又さんという人が、サケ漁をみせてくれるというのである。はたして、この目でサケをみることができるのであろうか。

11月3日、朝8時30分、川又さんの奥さんの経営するラーメン屋に集合した。川又さん自身は、バスの運転手である。ラーメン屋には、魚好きの人達が4~5人すでに集まって、お茶をのんでいた。今回、みせていただけるのは、『長袋（ながぶくろ）』という漁法である。川を横断するように大きな網を夜のうちにしかけておくと、魚が流されてきて中に入ってしまうのだ。雨の後など水量が増えるとおもしろいように魚がとれるのだという。そして、うまくすると、

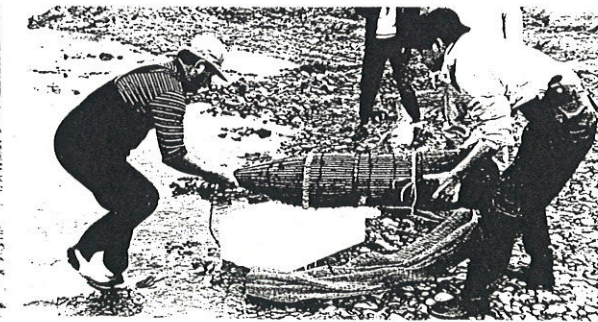


サケが入っているのだ。

網の大きさは幅5m、長さ10m程で、まさに長い袋状になっている。網をはすするのは2人がかりだ。水は深いところで腰くらいあり、バランスをくずすとそのまま流されてしまう危険がある。大学でサケを研究している大出君と川又さんの2人で10分くらいかけて慎重に網をはすし岸にあげた。かごの中は、魚でいっぱいでありかなり重そうである。

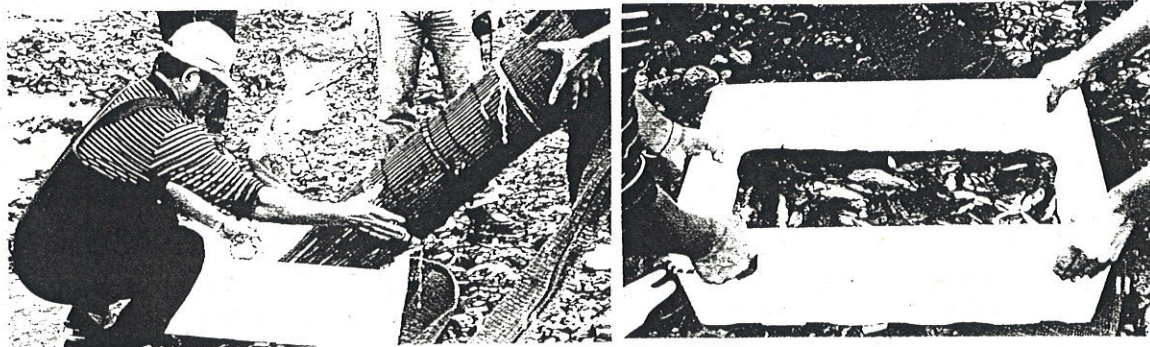


かごの先端をしばっていたひもとほるとき、発泡スチロールの中で逆さにすると、魚が一気にこぼれ落ちてきた。



30cm級のアユが約20匹、オイカワ、ウグイ、ニゴイ、カマツカ…多数の魚がはね回った。しかし、サケの姿はなかった。

「きのうは、3本くらい入、ただけどゆえ」川又さんが申しわけなさそうに、つぶやいた。



続いて、川又さんは、投網漁もみせてくれた。投網は、川の中のサケめがけて、直接、網をうつわけだが、サケの習性を熟知していなければならない。

サケのメス（地元では、メオと呼んでいる）は、産卵場所として、川底に直径数十cmから数mのくぼみを掘る。このくぼみを『ほり』と呼び、ほりが完成する前に、氣に入らなくて、放棄してしまったものを『ぶっこみ』と呼んで区別している。『ほり』の近くには

複数のサケが産卵の機会をうかがっており、ほりに入、た瞬間に網をうつのである。時又、「ほら、あそこにいる。」と指さしてくれるが、私には、全く、わからなかった。経験が物を言うのだろう。しかし、いっしょにいた青木さんには、みえたらしい。



サケがほりに入るまで、川又さんは、川の中で息をこらして、じっと待つ。そして“入、た。”となると、ほんの数秒で網を打つのである。



まさに早わざであるが、サケも、そうやすやすとは、網に入、てくれない。チャンスは、数回あったが、結局、全て、失敗に終わった。しかし、そばでみていると、サケと川又さんの真剣勝負といった感じが、あった。た、た一匹のサケをとるために、真剣に立ち向かう姿には、頭が下がる思いがした。また、サケも野性動物としての一面をみせてくれた気がする。

川又さんは、10年くらい前に見た、サケの産卵の話をしてくれた。その年は、サケが川をのぼるのが、おくれ、12月ころにやっと、現われた。年末に近いある日、ほりには、多数のサケが集まり、まさに産卵しようとしていた。メス（方言ではメオ）1匹に対し、オス（方言では、カナノス8匹いた。メスの産み落とす卵に、オスは、口を、か、と、開けながら、白い煙のような精子をかけているのが、岸からもよく見えたらしい。網をうつのも忘れ、しばらく見入、っていたという。

産卵を終えたメスやオスは、やがて、力尽きて死んでゆくのであろうが、サケたちにとっては、自分たちの使命が、終わ、て、ホッとした瞬間なのであろう。春になると、卵からかえたサケの稚魚を、みることが、できる。「3月下旬から4月初めにかけて、雨が降ると、稚魚は、一気に海へ降りていくんですよ。」川又さんは、しみじみと語、た。

こんな営みが、思川では、毎年、くり返、されているのである。